南葵音楽文庫ミニレクチャー Vol.9

『ケーベル先生と徳川頼貞』

林淑姫

2018 年 2 月 10 日（土）11：00
南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

ラファエル・フォン・ケーベル
Raphael von Koeber（1848.1.15－1923.6.14）

（1910 年）

ピアノを弾くケーベル（1910 年頃）

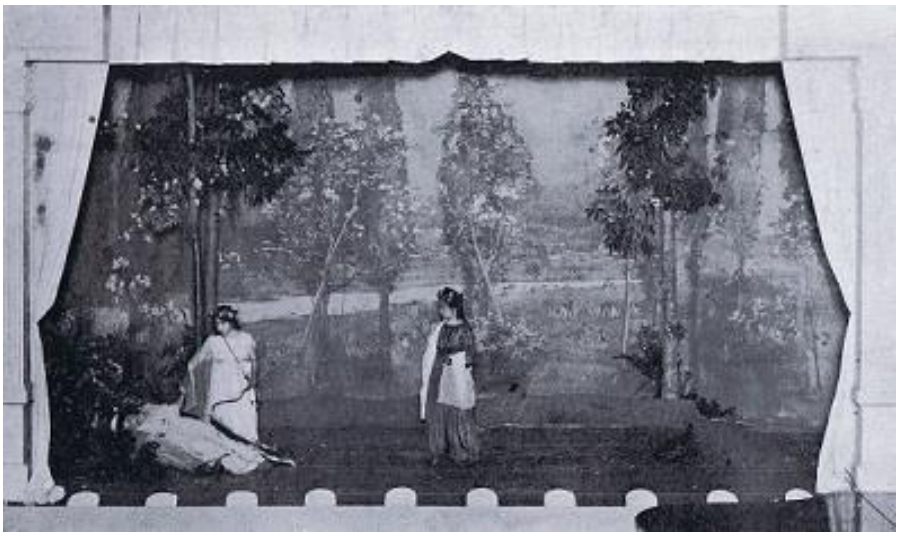
ケーベル博士

N 博士に伴れられて私が訪れたケーベル博士の家は神田の駿河台にあった。博士は三四人の下僕とともに静かな生活をしてをられた。晩餐が終ると、博士は私たちを書斎に導かれ、やがて私のためにピアノを弾いてくださった。初めはベートヴェンのソナタ「月光の曲」であった。弾き終るとその楽曲の大切な個所を反復して弾き乍ら、その曲の音楽上の要所を示され解説をして下さった。それからリスト編曲のワグナーの「タンホイザーの序曲」を弾かれた。私はこの壮大な音楽に心から讃嘆した。博士は私にワグナーが音楽家としてまた芸術家として、如何に偉大な人であったかを教えてくださった。それは優しく諄々として話され、時には手を取らんばかりにして説いて下さった。私は慈父にでも接したような思いであった。夜もおそくなって心を残してお暇を告げたが、博士を思うと今日もなほあの温和な面影が目に浮かんでくる。

徳川頼貞『薈庭楽話』（「二、少年時代の回顧」）より

ラファエル・フォン・ケーベルは 1848 年 1 月 15 日、ロシア・ヴォルガ河畔の古都ニシニイ・ノブゴロドに生まれた。父はドイツ系ロシア人の枢密顧問官。1867 年、モスクワ音楽院に入学。チャイコフスキーに作曲を、ニコライ・G・ルービンシテイン（1835－1881）にピアノを師事、優等で卒業したものの、内気な性格から職業音楽家として立つことを断念。ドイツに留学し、イエナ、ハイデルベルク両大学で哲学と文学を学んだ。エドゥアルト・フォン・ハルトマン（1842-1906）の推薦で来日し、1893（明治 26）年から 1914（大正 3）年まで 22 年間にわたり東京帝国大学の哲学講師として、西洋哲学、美学、ギリシア語、ラテン語、ドイツ文学等を講じた。また 1898（明治 31）年より 1909（明治 42）年まで東京音楽学校でピアノを教授するとともに音楽史の講義も行った。師事した学生に瀧廉太郎（1879－1903）、橘糸重（1873－1939）がおり、瀧がライプチヒに留学する際には紹介状を持たせている。東京音楽学校の教師を務めることにより同校主催の種々の演奏会に出演することも多く、ケーベル・ファンを喜ばせた。1903（明治 36）年、日本人による最初のオペラ上演「オルフォイス」（グルック作曲「オルフェオとエウリディーチェ」）でピアノ伴奏をつとめる。

豊かな学識と清廉な人柄は学生に多大な感化を与え、門下に西田幾多郎（1870-1945）をはじめ多くの研究者を輩出。夏目漱石（1867-1916）もエッセイ「ケーベル先生」（1911）、「ケーベル先生告別」（1914）を残している。1914（大正 3）年にドイツへ帰ろうとしたが、第一次世界大戦が勃発したため延期。そのまま日本に滞在し、1923（大正 12）年 6 月 14 日、横浜で 75 歳の生涯を終えた。



オペラ「オルフォイス」舞台　1903（明治 36）年 7 月 23 日　東京音楽学校奏楽堂
（左より）吉川（戸倉）やま（オルフォイス）、柴田（三浦）環（百合姫）、宮脇僊（アモール）

ケーベル先生の愛犬

【文庫資料紹介】

日本で最初に出版されたベートーヴェン「月光（ピアノソナタ，op.27，no.2）」

音楽社学術部編．音楽社出版部，明治42（1909）年8月10日刊行.

楽譜（28，8p.） 30.5×22.5㎝（製本31.0×23.5 ㎝）

解説：巻末p.1-8

標題紙

（右上端に徳川頼貞自署「Raitei」）

奥付

*p.1掲載の肖像写真は、『思想』23号〈ケーベル先生追悼號〉（大正12.8）より